仮面が育むプライバシーとつながり

現代の都市で、電気を使わない家を考えるにあたりテーマとしたいのがプライバシーである。

高温多湿の日本で壁を作り、他人の視線や音を避ける時、空調や照明が必要になる。現代においてプライバシーを守るには電気が必要である。

同時に電気はプライバシーを生みもする。人は常に明りに照らされ続けることで、その個人であり続けることになる。別の誰かにはなれない。あるいは空調を使おうと高気密高断熱の空間を志向すれば部屋は閉じる。

一方で世帯が核家族化や個人化し分裂できるのは、電気によって生活が便利になるからでもある。電気もなく一人では掃除も洗濯も終わらない。電気を使わない暮らしは、どうしても共同生活へと向かうことになる。しかし皆で暮らすからと部屋を閉じると暑い。開くと音はすべて漏れる。ここでまたプライバシーが問題となる。

以上のように「個人でいられること」「個人にされること」「一人になること」の様相は電気を介して相互に規定しあう。この様相は現代建築の基盤であるともいえよう。

現代の電気とプライバシーの関係を問い直しながら、現代で電気を使わないからこそ新しいプライバシーと豊かさを描きたい。

そこで本提案では、三鷹の森を敷地として仮面をつけて暮らす集合住宅を構想する。面をつけると声や年齢、性別が変わる。装束も着れば体型も変わる。想定される住み手は都市において自分を離れたい人、自分に疲れた人たちである。大きく３つの工夫を行った。

第一に、面ごとに小屋を作ってそこを入り口とした。そして日ごとに住人のつける仮面は変化することとする。「今日はぶんぶんしている気分だ」と思って般若の面をつけようとしていたら先に誰かに越されるということも起こる。

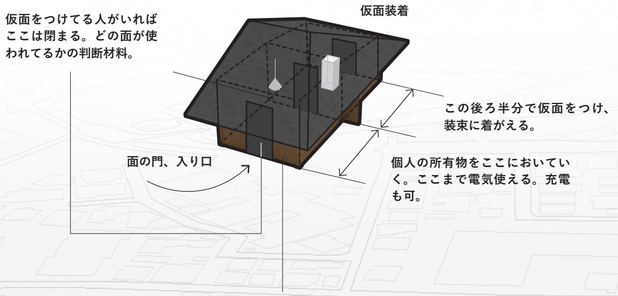
第二に、面に合わせ共同生活における役割を割り振った。例えば猩々の面には「落葉・ごみ掃除」と「炊事場の掃除と洗いもの」が割り振られている。分担できるように一つの仕事には２つの面の割り振りがある。

共同生活における仕事は、彼らのコミュニケーションのきっかけとなる。一方で相手が誰かはわからないので仕事や趣味のような話はできない。つながりは一日ごとにリセットされ、職能への習熟はそれぞれに溜まる。

第三に、この状況を前提として井戸端のように仕事と役割に紐づく空間の共有を軸に、それぞれが交わるようにつないだ。そこでは既存動線と人の多さなどに合わせ、集合住宅の内と外を入れ替えていくような構成とした。

ここは従来のプライバシーとは異なる、"開放系"のプライバシーが守られる場所である。すなわち常に人と交わるが交流が個人に帰属されない。電気を使うというルールは共同生活に個人性をもちこむ。コミュニケーションの言い訳を奪い、夜も労働可能にし、作業を個人へと分断する。仮面がなければ共同生活での役割は固定化する。

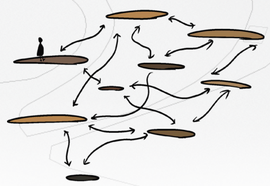
仮面があるから、役割も変わり機能も変わっていく。その中で「みんなで暮らしているけど、誰とも暮らしてないけど、いつも誰かと交流している暮らし」が生まれる。これは日常で仮面を利用する、現代における穏やかな自由の空間である。



面ごとの門と寝室。日ごと変わる面と役割

１日でリセットされるつながりと蓄積される職能

日ごとに面が変わるため、仮面をつけた人の関係性は１日でリセットされる。しかし外部の人はこのエリアにさまざまに入り込み、集合住宅内部へも入る。このとき外部の人から見た面としての存在は他者に引き継がれる。これが交流のきっかけともなる。そのために既存の移動軸線を横断するように分棟を配置した。



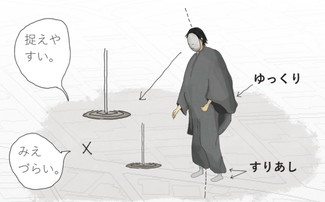
高温多湿の国において

プライバシーは電気を必要とする。電気はプライバシーを作り出す。

人と関わる暮らしにおいて、自分が常に自分としてラベリングされ続ける中での交流ではなく、もっと穏やかで匿名性のある日常的な共同生活を描きたい。それが街に開かれることで、仮面の住人達も、みんなの森を使えるよう守る番人のような役割も司る。

変わる声、年齢、性別、役割、歩き方を愉しむ

仮面をつけるからこその開放系のプライバシー



面をつけると地面のような面的な広がりが認識しづらくなる。視界に表れる木の根元などは、空間を認識する係留点となる。それを辿る経験は自然の発見を伴う。

面をかぶると視野がせばまり普通は身体を勢いよく動かせず、90 度回転もきつくなる。滑らかな斜めの空間の連続が楽になる。その角度に配慮してつなぎつつ、視界が狭まるからこそ、景色や周囲をゆったり動き、ゆったり眺めるようになる良さを楽しめる。そのため棟のあいまの森の楽しみ方として、森に外部者が入り込み、あるいは外に出ていくような行き来の楽しさをつくった。

翁（おきな）
「洗濯」
「落葉・ごみ掃除」

三日月（みかづき）
「洗濯」
「生活物品・お金・書類管理」

若女（わかおんな）
「戸締り・トイレ掃除」
「風呂を焚く・洗う」

老女（ろうじょ）
「買い出し・ご飯を作る」
「木・氷の管理」

猩々（しょうじょう）
「落葉・ごみ掃除」
「炊事場掃除・洗い物」

赤般若（あかはんにゃ）
「炊事場掃除・洗い物」
「買い出し・ご飯を作る」

俊寛（しゅんかん）
「戸締り・トイレ掃除」
「生活物品・お金・書類管理」

小癒見（こべしみ）
「風呂を焚く・洗う」
「木・氷の管理」

三鷹の森を中心とする敷地

都市の中にある森

敷地は三鷹の森である。小島の森として、膨大な自然が保全されているエリアを中心としている。吉祥寺の駅から歩いて 15 分ほどだが、木々が膨大に生え、街灯もなく、夜は真っ暗になる。公園側からこの森に近づくとふっと人の音が消える。反対側の、上水に沿って立つ木々は周囲の人家や公園の音をゆるやかに遮る。このエリアは散策道ともなっており、公園のあたりに比べ人は少ないが、それでも多くの人が通る。本提案では、このパブリックの動線と、仮面の空間はまじわりあうように設計した。